様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１０日現在

機関番号：３２６２７
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００７～２０１０
課題番号：１９５２０２１１
研究課題名（和文）　アジアにおけるシェイクスピア上演研究のための批評言語の構築に関する研究
研究課題名（英文）　For the establishment of the critical/descriptive language for the study of Shakespeare performance in Asia.
研究代表者
南　隆太（MINAMI RYUTA）
白百合女子大学・文学部・教授
研究者番号：６０２４７５７５

研究成果の概要（和文）：

本研究は、近年研究が活発化しつつあるアジア圏におけるシェイクスピア上演研究において、その議論の基盤となる英語における批評言語の構築を目指すものである。研究代表者（南）は、この目的のために、韓国、中国、台湾、インド、インドネシア、マレーシア、フィリピンなどアジア各国の研究者との共同研究を行い、英語圏の出版社より論文集を出版したほか、韓国、中国、台湾、日本のシェイクスピア翻案作品の英語版作品集の総合編集者として出版を企画し、出版を準備することができた。

研究成果の概要（英文）：

The principal purpose of this research project was to establish a critical/description language for the study of Shakespearean performances in Asia. Minami, the project leader, has collaborated with scholars from other Asian countries such as China, India, Korea, Malaysia, Philippines, Singapore, Taiwan, so as to establish a foundation for the critical discussion on Shakespeares in Asia. The project leader co-edited a collection of essays on the topic for Routledge (US) and also published articles for Cambridge University Press and other academic journals. He also read papers at international conferences in the UK, China, Taiwan and Korea. He is now preparing a 5-volume anthology of Shakespearean adaptation in Asia as a general editor, and this anthology will not only provide indispensable resource for international Shakespearean scholars but serve to establish the basics for critical discussion of Shakespearean performances in Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２００８年度	600,000	180,000	780,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：シェイクスピア、英文学、比較演劇、上演批評、アジア演劇

１．研究開始当初の背景

本研究代表者（南）は、本研究開始当初には、すでにアジアの研究者との人的ネットワークを築いてはいたが、さまざまな研究者と一堂に会して議論をする機会は限られており、その中で、研究者間の議論の基盤が薄弱であると感じていた。とくに英語圏での学会ではなく、アジア圏で学会を開催し話し合うと言う機会が少ないために十分な議論の時間がなく、アジアの研究者の主導によるアジアのシェイクスピア研究成果の発信の必要性を強く感じていた。
したがって、研究開始当初に求められていたのは、従来のイギリスやアメリカではないアジアの国や地域で、アジア圏の研究者間で議論をできる場を、具体的に設定することであり、その必要性は、アジア圏の研究者が切実に感じていた。

２．研究の目的

本研究は、アジア圏を中心としたシェイクスピア上演研究を行う者の対話を可能にする共通基盤としての批評言語の確立の可能性について考えるものである。主に英米の研究者による、あるいは英米の研究者を対象にした批評研究の在り方を問い直し、既存のシェイクスピア上演批評の枠組みにとらわれない研究の在り方を、中国、韓国、台湾、マレーシア等のアジア地域の研究者とのネットワークを形成し、恒常的な連携を行いながら「アジアにおけるシェイクスピア上演研究」の新しい枠組みの構築を目指すものである。

３．研究の方法

アジアを中心とする研究者間で共有できる批評言語は、英語によりなされる必要があるが、それぞれの伝統演劇や独自の演劇の描写を行うには、研究者間で相互に理解の可能性を確認しながら、協働的に議論する必要があった。したがって、アジアにおけるシェイクスピア翻案作品の具体的に取り上げ、英語訳と英語による説明を、アジアの研究者間で共有し、意見交換を繰り返すことに重点を置いた。特に中心となる研究協力者として、Penn State UniversityのAlexander Huang准教授、国立台湾大學のBeatrice Lei准教授、マラヤ大学のC.S.Lim教授、デリー大学のPoonam Trivedi上級講師との密な連携を行い、上演批評の実践と意見交換・相互批判を繰り返した。この際に、具体的な批評言語について共通認識を得られるかを、メイルを通してくり返し意見を調整し、また実際に学会やパネルディスカションを通して公開の場で示し、他の研究者からのフィードバックを求めた。

４．研究成果

本研究プロジェクトの成果は、大きく分けて3つある。
（１）国際学会を通じた人的研究ネットワークの構築と若手研究者の育成

下記の学会発表の欄に明らかなように、研究代表者（南）は、4 年間の研究期間において研究テーマに基づく研究発表を国内で１回、海外で７回行い、またパネルディスカッションを国内と海外で１度ずつ企画し、運営している。しかも海外の国際学会の開催場所は、ロンドン（連合王国）やオタワ（カナダ）など従来から英文学関連学会が開催されると思われる場所以外に、寧波（中国)、ソウル（韓国)、台北（台湾）での学会で研究発表を行ってきた。特に、台湾国立大学のシェイクスピア・フォーラムには積極的に参加し、本研究プロジェクトの成果として、学会を国立台湾大學と共同主催し、パネル・ディスカッションを企画・運営した。このような海外研究者との共同作業は、強力な人的ネットワークの構築を可能とし、研究者間の信頼関係を築くことを可能にした。その成果は、（２）の研究論集の出版と（３）の英訳版翻案集の出版において十分に発揮されているだけでなく、今後の共同研究の発展はもちろんのこと、若手研究者育成に大いに役立っている。とくに若手研究者の育成と言う点では、日本国内の大学院生およびポスドク研究者（計 3 名）の国際学会での研究発表を補助する以外に、アメリカ、台湾、韓国の若手研究者に対して研究協力を行い、国際的な視点から研究者としての育成に貢献している。

（２）研究論文集の出版を通して実践的に批評言語の確立を試みた

本研究が、国際的な共同研究を中心にしているため、研究成果の発表が国際学会と論集の出版が中心となり、雑誌論文は、雑誌に掲載された査読を経た劇評のみである。この劇評論文は、能の形式によるシェイクスピアを英語によってどのように解説し批評をするかを実践したものであり、その内容は、2010 年に国立台湾大學で開催された学会（シェイクスピア・フォーラム）の際に開催されたワークショップ、および台南の中山大学でのワークショップでの口頭での説明を基にしたものである。
研究書（論文集）の出版にあたっては、マレ

ーシア、インドなど海外の研究者との共同作業を通して、議論に不可欠な共通基盤の共有が不可欠であった。とくに編集者として論集を制作するにあたって、共通理解の確立こそが最も重要な点であり、編集者間、そして執筆者との意見調整は、本研究の目的を実践的に行う貴重な機会となった。このような協働作業は、編集者としてではなく、論文の寄稿者として編集者とのやり取りにおいても十分に行うことができた。下記の出版図書に上がっている。出版されたものとしては、“Shakespeare for Japanese Culture”があるが、これは日本の宝塚の舞台をどのように批評的に議論し、海外の研究者と共有できるかを試みたものである。これ以外に、2011 年度内に出版が予定されているものに “Is No Shakespeare in Noh Shakespeare”が国立台湾大學の Beatrice Lei 氏の編集による *Shakespeare in Culture*（台湾大學出版部)、“Shakespeare as the icon of enemy culture: Re-searching Shakespeare on page and stage”が、Irene Makaryk 編 *Wartime Shakespeare*（トロント大学出版部)がある。それぞれが、国際学会での研究発表を基にした論集であるが、それぞれの原稿作成の過程では、本研究テーマである批評言語についての議論がメイルによっても繰り返しなされ、その成果が出版の後には確認できるはずである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

Ryuta Minami, “*Noh King Lear*,” *Multicultural Shakespeare: Translation, Appropriation and Performance*, Vol. 6 (21)/7 (22), 159-164,2010.

〔学会発表〕（計 10 件）

1. 口頭発表 Minami Ryuta, “‘Re-placing Shakespeares on the Japanese Stage” (11 September, 2008)Panel 7: Resistance in regional Shakespearean canons, Renderings: Shakespeare across Continents. University of Nottingham Ningbo, China, 10-12th September 2008.

2. 口頭発表 Minami Ryuta, “‘Thou doth here usurp the name thou ow’st not’: Recreating Shakespearean Characters in Japanese Pop Culture,” The Reception and Transformation of English and American Literature in Asia. (27, September, 2008) Hosted by the Department of Foreign Languages and Literatures, National Taiwan University, September 26-27, 2008

3. 口頭発表 Minami Ryuta, “Revising Shakespeare on the Noh Stage: Afterlives of Shakespearean Characters,” Seminar: Localising Shakespeare in Asia, led by Bi-qi Beatrice Lei. (11 September 2009). Local/Global Shakesperares, The Fourth British Shakespeare Association Conference, 11-13 September 2009 at King’s College London and Shakespeare’s Globe.

4. 口頭発表 Minami Ryuta, “Shakespeare as the icon of enemy culture: Re-searching Shakespeare on page and stage” (19 September, 2009), Wartime Shakespeare in a Global Context/Shakespeare au temps de la guerre, 18-20 September 2009, University of Ottawa.

5. 口頭発表 Minami Ryuta, Re-defining the ‘Foreign’ of ‘Foreign Shakespeares’ in Asia: Ninagawa Yukio’s *Kabuki Twelfth Night* and its Audience” (24 October, 2009), International Conference on ‘Shakespeare in Asia’October 23-24, 2009, Sookmyoung Women’s University, Seoul, Korea.

6. 口頭発表 Minami Ryuta, “Is No Shakespeare in Noh Shakespeare?: Re-/Mis-Shaping Shakespeare on the Noh Stage” (27 November, 2009), ‘Shakespeare in Culture: Fourth Conference of the NTU Shakespeare Forum,’ 26-28 November, 2009, National Taiwan University.

7. 学会共同開催（企画・運営）
Orienting Shakespeare in East Asia: The Fifth Conference of the NTU Shakespeare Forum National Taiwan University. Taipei November 25-26, 2010. Organizers: NTU Shakespeare Forum & Shirayuri College/Minami Ryuta, Japan

8. 口頭発表 Minami Ryuta, “Translating Shakespearean Adaptations back into English: Editing an anthology of Shakespearean Adaptations in East Asia” PANEL: Shakespearean Adaptations in East Asia: Editor Session. (Nov. 25, 2010), Orienting Shakespeare in East Asia: The

Fifth Conference of the NTU Shakespeare Forum National Taiwan University. Taipei November 25-26, 2010.

9. 第46回シェイクスピア学会（早稲田大学文学部戸山キャンパス2007年10月7日）
パネルディスカッション：Opening up Dialogues on Shakespeares in Asia: Towards a Comparative Study of Shakespeare Performance in Asia。司会：南隆太。台湾、シンガポール、アメリカから研究者を招いて開催。

10. 日本イギリス児童文学会全国大会　シンポジウムⅠ：MANGA Shakespeare：グローバル化するマンガ／シェイクスピア（司会：南隆太）
発表：南隆太「マンガ・コミックス版Shakespeareはいつ始まったのか：Illustrated Classicsからマンガ・Shakespeareへ」

〔図書〕（計3件）

1. *English Studies in Asia*, edited by Araki Masazumi, C.S.Lim, Minami Ryuta and Yoshihara Yukari (Kuala Lumpur: Silverfish, 2007)

2. *Re-Playing Shakespeare in Asia*, edited by Poonam Trivedi and Minami Ryuta (New York; Routldge, 2010)

3. Minami Ryuta, Shakespeare for Japanese popular culture", in *Shakespeare in Asia: Contemporary Perofrmance*, edited by Dennis Kennedy and Yong Li Lan (Cambridge University Press, 2010), 109-131.

６．研究組織
(1)研究代表者
南　隆太（MINAMI RYUTA）
白百合女子大学・文学部・教授
研究者番号：６０２４７５７５

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし